

Title	包世臣の實學思想について
Author(s)	大谷, 敏夫
Citation	東洋史研究 (1969), 28(2-3): 162-195
Issue Date	1969-12-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/152797
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

包世臣の實學思想について

大 谷 敏 夫

まえがき

一 實學の復興と包世臣の經世觀

二 官僚社會批判と包世臣の行政觀

三 財政危機と包世臣の財政觀

農 政 論

漕運・河工・鹽政論

四 包世臣と阿片戰爭

おわりに

儒教理念が中國の士大夫の思想的基盤をなしていた時代において、その理念により構成されている儒教的國家體制における矛盾が増大してくる時、その矛盾を防止するための思想を士大夫は種々模索する。その結果矛盾の防止には、單なる理念の強調では不可能であり、結局は改制によらなければならないと認識するに至った。このように矛盾により崩壊し始めた儒教的國家體制を改制という改良主義的手段により維持しようとする一群の學者の學問を實學Ⅱ經世致用學と本稿では呼んでいる。さて實學者が儒教體制を再編成することにより、その矛盾を回避しようとした試みは、結局は帝國主義との對決において挫折するのであるが、實學者の提起した問題の中には、その後の中國の進むべき方向を示唆したものもある。

り、こういう點でこの期の實學の研究は意義あるものと思われる。清朝に於ては儒教體制のもつ矛盾が顯著になり始めるのは嘉慶・道光期であるが、本稿ではこの期の實學の系譜を辿ると共に、この期に生をうけ、この矛盾をいち早く認識していた包世臣^⑧の思想を、彼とも交友關係のあった經世家(魏源・龔自珍)と對比しつつ分析しようと試みるものである。なお、本文中「安吳四種」から引用した資料は安吳四種という言葉を省略し、その卷數と題名のみを記す。

一 實學の復興と包世臣の經世觀

明末清初の顧炎武によって代表される經世濟民を目標とする實踐的な政治經濟理論の研究^⑨は清朝の思想彈壓策のため久しくとだえていたが、嘉慶道光の頃より思想界に實學勃興の氣運がおこってくる。その際經世濟民をめざす實學者が尊重した著書が顧炎武の日知錄であつた。

百餘年來言學者必首推亭林。亭林書必首推日知錄。……中略……然後知予之所以信亭林者、乃即亭林之所以自信。宜其立說之多符合也。(卷八 讀亭林遺書)

世臣も日知錄に啓發されて經世をめざした事實を告白し、日知錄こそ經國碩猷であり、江河日下るの人心風俗を起させるものであると述べている。嘉道以後有識者が實學を志すようになったのは、白蓮教の亂に始まる内憂や阿片戰爭を招いた外患によるところが大であるが、これらの現象が清朝國家體制を動搖せしめ、危機回避の學として實學が登場してくる。實學の復興を可能にした政策として、朱珪による禁書弛禁の上奏があるが、恐らくこれは實學者の要請であつたと思われる。又嘉慶帝は親政に當つて言路を開くことを治政の目的となしたので、言論界が次第に活發化してくる。かくして乾隆から嘉慶にかけて、吳派、皖派の如き有力な漢學が形成され師説を遵守することが尊重され學問が固定化する傾向の中にあつて、常州を中心とした江淮地方に實學者の一群があらわれてくる。

當時常人推爲通經宜用之學者、競言二申。海內亦胥重之。二申者劉申受李申者也。若由二申之學而再推演、則如後之魏

默深、龔定庵、亦皆與常州學派有關。（清稗類鈔卷六十九 經術類 常州二申通經）

嘉慶、道光期常州では二申として尊敬されていたのは劉逢祿（申受）と李兆洛（申者）であり、前者は公羊學の立場から後者は史地學や文論を通して經世致用の學を志していた。劉逢祿は公羊の解釋に際し何休の注に基づく三科九旨說を採用し、公羊學を考證學から實學に展開する理論的根據を明らかにしたが、魏源、龔自珍はこの說に基づき、公羊學を一層現實的な政治理論の場に適用することに成功した。又李兆洛は當時士大夫が訓詁音聲に没頭していた中であつて、ただ獨り通鑑、通考の學をやっていたが、それは彼の實學尊重の精神に由來するものであつた。だが當時實學は士大夫にとつては寧ろ輕蔑すべき學問であり尊重されていなかったが、李兆洛はそのような社會風潮に對して憤慨している。

國家承平既久、四方無事。士之以文學取仕進者、率瑣琢無益之詞、雍容揄揚鋪飾盛美、其有懷未然之慮、憂末流之弊。深究古今治亂得失、以推之時務要於致用者、必迂而擯之且以爲狂悖。此吾友許蔬園張翰風、包慎伯之所以筑筑於世者也。（李養一先生文集 卷六 蔬園詩序）

李兆洛は張惠言、包世臣の實學を高く評價しているが、この三者は文人として新しい時代精神を代表する者であつた。

梁啟超は常州學派として劉逢祿等の公羊學派と李兆洛、張惠言等の陽湖派古文があり、これが合して龔・魏による實學が勃興したと規定しているがこの指摘は重要である。魏源・包世臣を始め實學をめざす學者の交流が常州を中心として盛んとなり、ここに實學派が時代の要望に應じて社會の表面に浮かびでてくるが、その發端は二申であつた。特に李兆洛は魏源・包世臣・周濟・馮桂芬等經世致用をめざすすべての學者や、陶澍の如き改革派大官にも深い影響を與えた。この李兆洛と親交が深く、又魏源・包世臣が共に尊敬し交流した實學者周濟は晉略の著者であり、史學家としても著名であるが、特に兵法、鹽法など實學の面でも、當時一流の學者であり、孫玉庭の幕友として淮南北の鹽梟充斥に取り組んでいる。

乃出遊求天下之士、得涇包君世臣、以實事相切劘、屏去瑣碎、提挈要領、卓然爲通儒有用之學、云々（周濟、求心堂存藁（彙編、折肱錄本傳））
周濟は包世臣との交流を通してその實學を深め、當時吳中では水利では包世臣・兵機では周濟と並稱されていたと云う。

ここで注目すべきことはこれらの實學研究の場が詩社であつたことである。一般に清朝學問は清朝政府の朋黨策もあつて明末清初の詩社的な傾向は衰微し、撲學が重視されていたが、嘉道期に至つて漸く國家の危機を意識し始めた士大夫の中には進んで結社を構成し、詩文を論ずる一方國事に關する討論もかなり活發化されてきたのではないか。嘉慶十九年に成立したと稱せられる消寒詩社と、その後身である宜南詩社の主要メンバーであつた陶澍・林則徐・梁章鉅・胡承珙はいずれも當時一流の經世政治家であり實學者との交流は深かつた。又黃爵滋と交友の深かつた張享甫は道光年間江南の災害に接し憂民の文を發表しているが、これらの詩人が當時經世に無頓着であつたと言えない。そして經世の士であるならば、經學者、詩人、書家を問わず集會して國事を論ずる氣風が育成されてきた。道光十二年の龔自珍主催の詩會の時には、包世臣も魏源・宗翺鳳と共に招待されている。實學者はこれらの詩社を通して改革派の大官に接近し、彼等の幕友となり、その政策を行政の場で實現するよう働きかけたものと思われる。その場合改革思想をもつた實學者を招く林則徐などの大官は、腐敗した清朝を儒教的理念に基づく廉潔な行政を實施することにより、その體制を維持していこうとする名臣であつた。

ところで後世の學者が實學者の改制案を検討すると、其は歴史の進むべき方向を示唆したものとしている。包世臣の「說儲」の中にみえる改制案は、光緒末から民國にかけての學者により高く評價されている。

右說儲一書、安吳包慎伯先生著。其刻于安吳四種中者、僅其序例。其篇中多改制之言。嘉道之際、文網尚密、故未刊行。吾觀此書、精義大抵、在于重官權達民情二端。其說多出于崑山顧氏、行之于今頗與泰西憲政之制相合。

當嘉道之世、中國之局、方守其老拙不化、而先生已先見及此、仁和龔氏之外一人而已。(劉師培 左龔外集卷十七 包慎伯說儲跋)

劉師培は光緒末にあつて歐米思想崇拜の中で國學の復興に努力した人物であるが、包世臣を顧炎武の流れをつぐ實學者として規定し彼の改制案は泰西憲政の制と相合するとまで言っている。

又安吳包世臣爲說儲、在嘉慶辛酉、已切實爲清廷擬新制矣。越後以公羊言改制最激者、極於戊戌之變政。然如廢八股、開言路、汰冗員諸要端、包氏書亦一一先之也。(錢穆 中國近三百年學術史第十一章 龔定盦 定盦之論政)

又民國の清朝學術史研究の權威錢穆も、彼が嘉慶六年に官制と任官制改革の意志を有していたと指摘し、公羊變法派による戊戌の變政の先驅者であると述べている。彼の改制の狙いは財政を再建して急需に備え後患を杜し、任官制を改革して人材を育て民俗を善くするところにあったが、その治政の根本は地方郡縣の制にあるとなし、保甲、學政、戎政、課績、農政の五事に就て詳説している。^⑤ この地方郡縣を重視する思想は「日知錄」にもみられるものであり、包世臣が顧炎武の思想に基づいてその改制案を樹立した點は否定できないが、但彼が「章句を摘して以て經を説き、畸零證據に及ぶは、猶未だ經生射策の習を免れず」(卷八 讀亭林遺書)と稱して顧炎武の學の考證偏重を批評しているのは、彼の實學がその實踐性をより深めようとした意圖のあらわれと理解してよいであろう。ここに包世臣に至って實學の目的が社會を改良しその幸福を増し國計民生を安定させるという方向を指針したものと考えてよい。こういう點において近代變革思想の端緒を龔・魏とするのが通説であるが、私は包世臣も加えるべきだと思ふ。^⑥

以上嘉道期における實學勃興の氣運につき略述したが、次に包世臣の經世思想の構造を分析しよう。世臣が實學を志す熱意をもったのは、孟子の尙志の説(盡心篇第七)に感動して深く天下の利病を研究しようとしたとあるが、ここから彼の理想が仁義に基づく禮教的秩序の再建であり、それを實現するための經世策であったことである。というのは彼が生きた時代がまさにこの儒教理念と相反する状態が進行していたのである。

世臣生乾隆中、比及成童、見百爲廢弛賄賂公行、吏治汙而民氣鬱、殆將有變。思所以禁暴除亂、于是學兵家。又見民生日蹙、一被水旱則道殣相望。思所以勸本厚生、于是學農家。

又見齊民跬步、卽陷非辜、奸民趨死如鶩而常得自全。思所以飭邪禁非、于是學法家。(卷八 再與楊季子書)

世臣は乾隆以後の腐敗した官界、反亂の續發、民生の不安、財政危機に直面して兵家、農家、法家の研究の必要を感

じ、古典の研究と人情地勢の實地調査を行なった。彼自身貧苦の中に育ち民間の疾苦を體驗したことも彼を實學者として進ませる動機となつた。彼は舟子・與人・樵夫・漁師・罪隸・退卒・行脚・僧道など民間の凡ゆる階層の人々と接し水陸の險易、物力の豐耗・衙前の情偽、窮檐の疾苦の事情を聴取し、一方ではその事物に關係ある書物を研究して經世策を關係官僚に進言した。こんなところから彼の學問研究は宋學・考證學の如き分野は深めず、専ら經世の根據を得るために經史子集等凡ゆる分野を漁っている。

世臣於經則詩禮、於史則國語、國策、馬、班、陳、范、資治通鑑。於子則孫、吳、孟、荀、韓、呂、於總集則文選、古文苑。於彙編則通典、冊府元龜、山堂考索、稍見其深。其餘冊籍、徒涉涉獵、未有眞得。(安吳四種 總目叙)

中でも世臣が兵・農・法に關する諸子の學に注目したと、荀子の學を重んじたところに實學尊重の氣風が察取できる。即ち世臣は荀子を媒介として孔孟に基づく禮教的理念と兵・農・法という實踐的な學問を結びつけることにより實學を體系づけようとしたのである。即ち世臣は荀子の禮の思想に着目してそれが孟子の理の思想と決して矛盾しないことを明らかにすると共に、文論の立場から荀氏を文の祖として韓非、呂氏等をへて柳宗元・蘇軾に至る文統を考え一つの體系を樹立せんとする。

文之奇宕至韓非、平實至呂覽、斯極天下能事矣。其源皆出於荀子。……中略……荀子外平實而內奇宕、其平實過孟子、而奇宕不減孫武。(卷九 摘鈔韓呂子題詞)

これは桐城派方苞が孟子を祖として韓愈を中興者として方苞に至る文統を考え宋學を重視するのに對し、世臣は孟子のみを重んじて荀子を異端として斥けた宋儒の説を不服とし荀子の傳統が韓非や呂覽をへて柳宗元・蘇軾に傳えられ更にそれが世臣自身に達すると主張した。世臣が荀子の學に注目したのは乾隆年間に「荀卿子通論」を著し、七八百年間殆んど顯りみられなかった荀子の學を復活した汪中の文集を通讀してからである。當時荀子の研究は餘りなされておらず、たまに沈欽韓が研究しているのを知り同志を得たことに感激した世臣は彼に手紙を書き、後儒が荀子を異端として斥けてい

ることには不滿の意を表すると共にその復活を強調する。

荀子之所持者禮也。孟子喜言理而荀子喜言禮。近人凌君次仲作原亂三篇、謂禮由理而始生。知此義者可以會通孟荀二家之說矣。荀子喜言富國亦喜論兵。然一秉之於王道與戰國策士不同。(國粹學報第一年上卷 包慎伯致沈小宛書)

世臣は荀子の禮の思想は孟子の理の思想に由來しているから、兩者は基本的に同一であると定義し、荀子が性惡説を唱え、又富國強兵を主張するのは末俗淩夷の時代のためであり、王道を尊ぶ精神は失っていないとのべ、荀子を霸道の根原であるとする從來の荀子像を否定する。

故謂富強非王道之一事者陋儒也。若遂以富強爲王道、古先其可誣乎。荀子曰學始于誦詩終于安禮。學至于禮而止。孟子曰動容周旋中禮者盛德之至也。孔子曰齊之以禮、有禮則安、以禮爲國乎何有。(卷八 再與楊季子書)

ところが王道のみを主張して富強を考えないのは陋儒であると考え、富強の必要性を強調している。逆に富強のみを主張して王道を考えないならば秩序は亂れるとする。

禮が廢されれば利を求めて争がおこるので刑を嚴にせねばならないとのべ、禮こそが社會秩序をもたらすものであると考え、その實現は人々が義を尚び讓を重んずることとなりと結論する。以上世臣が實學を志したのも國家の利病を追求してその對策を立て禮教的秩序を樹立するためであった。そしてこれこそ王道であり富強は其に達する手段としか考えていなかった。但富強の必要性も痛感しており、そこから荀子を始め諸子の學を開拓した。ところが魏源になると富強あつての王道という思想をもっており、實學の目的を富強の道に求めている。魏源が「古より王道あらざる富強有るも、富強あらざる王道無し……中略……國富強にして法立つ」(古微堂內集(卷二治篇一))と述べた時に、吾々は禮教的秩序よりでて未來を指向する公羊學者の一面をみるのである。一般に禮の思想は桐城派により秩序維持の理論として尊重されるのに對し、公羊學は變法派の理論に適用された。ところが世臣の場合は禮の思想を強調する一方改制をも主張しており、ここが彼をして桐城派の枠内にとどめず獨自の道を歩ませることになり、龔・魏等の改制派の思想家と結びつく所以でもあった。

二 官僚社會批判と包世臣の行政觀

包世臣・魏源・龔自珍等變法思想の先驅者達に共通してみられる要素は、腐敗した官界の原因として、官僚の儒教的倫理觀——即ち廉恥心の缺如と任官制の缺陷をあげていることである。そこでまず前者について検討すると、龔自珍は既に嘉慶十九年に「明良論」を著し、その中で現時の官僚には廉恥心がないことを指摘する。

士皆知有恥、則國家永無恥矣。士不知恥爲國之大恥。(龔自珍全集 定倉 文拾遺 明良論二)

侯外廬は龔自珍の廉恥論は單なる倫理觀ではなく、清朝專制體制下における官僚社會を批判して更法を意圖したものであると規定している。自珍が更法の意圖を廉恥という人間精神の問題に還元して解釋しているという侯氏の見解は確かに卓越したものである。^⑥當時憂國の士がまず官僚に求めたのは廉恥ということであり、それが官僚に缺けているのは、單に官僚個人の問題ではなく制度にも原因があるという認識に到達した時、始めて變法ということが政治の課題となってくる。包世臣も亦嘉慶二十五年に「庚辰襟著」を著し、その中で廉恥論を展開している。

孔子曰、行已有恥可謂士矣。道政齊刑、民免而無恥、道德齊禮、有恥且格。管子曰、禮義廉恥國之四維。孟子曰、人不可以無恥、不恥不若人、何若人有。……中略……凡以恥者、人所其受於天、懷於心則爲恥、見於事則爲義。人而無恥、惟利是趨無所不至。……中略……利心勝則恥心微。是故利者義之反、而恥者義之源。廉恥不明則禮義路塞。吏與士如此、且何責於齊民乎。(卷二十八 庚辰襟著一)

世臣は王道政治の理想を示した孔孟の名句に基づいて恥の定義をなし、人が恥を失えば利に趨いて墮落し、人が恥をもてば仁義の心が生じると言う。宋以後士大夫の儒教的倫理として「君子は義に喩り、小民は利に喩る」という名句が尊重されていたが、世臣自身この倫理を觀念としてではなく、實踐の名題として強く意識していた。ところが當時の士大夫は、この名題に反して利を追求することが慣例となっており、科試を通過して官僚となることは利祿を追求する手段とな

つていた。當時の「三年清知府、十萬雪花銀」という言葉が常識化していた實狀がこれを證明している。當時官僚になると正規の俸給の他、養廉銀と行政費としての公費が支給せられたが、その他に陋規を得ることが慣行化していた。官僚は陋規を得る場合、しばしば上司と屬吏がぐるになっていた。屬吏は上司に賄賂を送つてその代償として虧缺をなすことが多くなり、これが習常化しているのに非難の聲すらおこらない狀態であつた。このような官界の腐敗を目撃した世臣は、この原因はすべて官僚に廉恥の道が消え利をみて義を忘れるところにあると結ぶのである。然し世臣は現今の官僚に廉恥心が缺けるのは、利を追求する手段となつてゐる任官制に原因があると考へてその改制を主張したが、ここに彼が廉恥の問題を單に士大夫の個人的修養に留めず制度として把握した觀點がうかがわれよう。世臣によれば科擧は天下の人材を網羅する制度であるのに、現今の如き試験制度では眞の人材が得られないと言う。

若謂試弊必除而眞才始見。八比八韻會何關世道人心之數而詔爲眞才。……中略……唯舞弊者波靡而不知止、則害廉恥以

害政事、實有算數譬喻所不能盡者。(卷三十一 讀律說下)

即ち八股文中心の科試では舞弊がはびこり廉恥が失われ政事が害される。というのは士大夫は平日記誦、摹擬のみを注意し、科場においては懷挾、冒籍等の不正をなしている。このような科試では人材どころか穿窬のみが増加している。そこで世臣は八股文に代つて治民の術としての通鑑の如き史書や、兵農等の實學を重視すべきだと言う。科試に對する批判は當時實學者の共通の課題であつた。龔自珍は「干祿新書」を著して科擧制を譏刺し、八股文に壓倒され眞の有用の學が輕視されている風潮を批判している。

後世之養人用人也不然。其造之試之也、專以無益之畫餅無用之雕蟲、不識兵農禮樂工虞士師爲何事。及一旦用之也、則又一人而徧責以六官之職。(古微堂內集 卷二治篇)

魏源も亦科擧に於ては現實におよそ實効なき無用の學が重視され、官吏になつても無用の事に勢力を注いでおり、一旦事がおこると責任を官吏に課するのはどういふことかと言う。この三者の思想家に共通していることは世が衰微していく

のに優秀な人材が出ないのは、人材がいけないのではなく人材を培養する制度に問題があると考えていたことである。科舉制を批判した世臣は、次に任官制としての捐納の廢止を主張する。周知の如く捐納は清代においては――特に嘉道期に――任官の一方法として相當發達してくるのであるが、この賣官による任官制については、當時士大夫層に種々の反響があったものと想像される。

蓋商賈出資以得爵命則利操其權。農民積善以得爵命則義操其權。利有權邪惡並興、義有權則忠孝踵至。數年之間、貴德之俗成、官吏士民共以孳孳求利爲恥。(卷二十八 庚辰樓著)

世臣によれば捐納により官になるのが常例とならば、人々は德よりも貨を大切に考えるようになり、力耕して國につくしている者でも報捐力がなれば貧窮することになると言う。

そこで彼は捐納を廢止して西漢孝弟力田の科に仿うことを提案する。その具體策は農民中の敦篤力作者を選んで任官し、従前の報捐の職員・貢監を減少していくと、鄉村に於いて篤農者が増加し捐納者がなくなる。ここに利は斥けられ義に基づく理想的な地方行政が實施する。ここにみられるように世臣は科舉における實學の採用と捐納にかわる孝廉方正などの制科を重視し在野の遺賢を網羅せんとする思想をもっていたが、これは彼が從來の腐敗した實政に無智な官僚に變る新しい官僚像を求めていたことを意味している。即ち世臣の求めていた官僚は、鄉村において匪類から秩序を守り、民生の安定に盡力することができるような實務的な能力のある人物であった。世臣自身このような實務家の出現を痛感したのは、彼の前半生の九年間に互つて中國を振動させた白蓮教の亂を経験したからである。この間彼は多くの地方官の招きに應じて激戦地を巡回して對策を講じたが、その中で彼が得たものは、官兵と遊手無賴や被難民からなる官辨の郷勇が頼りにならないものであり、眞に鄉村を守るものは民辨の團勇であるということであった。この時合州知州龔景瀚が堅壁清野の議を提案し、堡壘を設置し保甲を清查し壯丁を防備員として鄉村の防備を自らの手により行わせようとしたが、これが亂對策に効果を發揮したと評されている。ところがこの議は世臣の構想であつたと范麟はのべている。確かにこれと同じ

ような考え方が世臣の鄉村治安對策の根幹となっていた。

剿寇本以保民。若有司拊循無術、則民不安生、勢必流爲匪類、亂將滋蔓。及拒任視事、則倡議團練鄉壯、使守望有助、徧查保甲、使奸宄難容、嚴禁驛騷、使難民復業。(卷三十四 平閩紀書後)

保甲組織を強化して鄉村自治を確立し、民生の安定を計りて無業の民をなからしめ、團練を組織して匪類から鄉村を守らせるという案であつた。それと共にこのような鄉村を指導すべき有能な人材を任官することであつた。

このような鄉村統治策はその後黃爵滋により綜核名實疏として提案されている。然るに民衆暴動の續發する所以は官の民に對する誅求と郷紳層の貧民に對する壓迫であり、この問題を解決することなくして鄉村の安定はありえない。この點になると世臣は官や紳富の良民に對する搾取を批判する一方、良民の抗糧は恥であるとして暴動を否定する。そして富民は進んで獻納し平素より蓄財し災害に備えよという妥協的解決策を望む。かくして世臣は鄉村における士・吏・民の三者のあり方につき、民は游惰を戒め以て地方に盡し、士は名節を勵みて以て實用を求め、吏は利弊を究めて以て民隱を卹れみ、官民一體となつて危機を回避しようとするのである。ここに世臣が清末官僚社會のもつ矛盾を認識しながら、それを解決する方向を探り得なかつた理由がある。ところが龔自珍となると「天下を有つもの、これを平らかにするの尚きより高きことなし」(定齋文集 卷上平均篇)とのべ、貧富の差のため人心が荒廢して暴動がおこるものだとし、その解決策として土地配分の平均を論じている。龔自珍の言う有恥の士はこういう民の動靜を察し、適切な更法の處置をなしうる能力を有するものでなければならなかつた。ここに兩者が同じ更法を意圖しながらも、龔自珍には變革を進めるエネルギーを正しく評價する觀點があり、現體制内での改革を固執する世臣より秀れた洞察力があつたと言える。

さて實學者として官僚社會を痛烈に批判してきた世臣は、道光十八年大挑により新喻知縣に任命されると、廉潔を旨として主として漕運に關する積弊を除かんとした。當時新喻縣は前任の知縣の失政重なり官紀が亂れ、邑人は知縣をないがしろにし、各役は逃散し漕棍が横行していた。そこで着任した世臣は、紳耆と書吏を集めて漕は正供であるので官民一體

となつて正當な徴收をなすべきだと説き、漕にまつわる弊害を除かんとした。そこで世臣は漕運則例を遵行して浮收勒折を禁絶せんとしたが、擅に舊章を變じ科斂の嚴であるという理由で効されて官を去っている。

然而世臣在新諭辦漕、恪遵漕運則例、禁絕浮勒。此時爲閣下謀、仍不外於浮勒、月攘一雞。論者必議其不恕。然審時度勢、非此斷不能行。(卷七 復桂蘇州第二書)

當時漕政に基づく陋規は既成の事實になっていたが、彼は敢てこの惡習を打破せんとしたのである。挑東之はこのような世臣の態度を「倦翁新諭漕事を自辨するに及んで、則ち天下の人、共に法を犯す、倦翁獨り犯さず云々」(卷三六 書安吳四種後)と述べているが、彼こそ道光官界の腐敗せる中で、廉潔なる政治を有言實行した行政官であつた。彼は行政官は公を先にして私を後にすべきだといふ信念をもつていた。これは當時政治家になれば利を増やすことができる現狀を批判したのである。かくして彼は任官しても少しの財産も造らず、民生の安定に意を注いだので、彼の行政は豫章の人々から善政として語り傳えられた。然し世臣の如き腐敗に敢然と立ち向う廉潔の行政官は、賄賂が公然と行なわれていた官界では受けいれられず、一年で効されているが、ここに廉潔だけでは解決しえない清朝支配機構のもつ根本的矛盾——法規の上では賄賂を禁止しているが事實上は規費等を認めている——が存在する限り、浮收や勒折を禁絶することは不可能であつた。即ちこのような現體制の矛盾を解決する方向は、結局は世臣の如き則例の遵守では不可能であり、陋規そのものを可能ならしめた清末官僚社會の變革以外にありえなかつた。然し世臣が官僚社會を批判した結果導き出した任官制や官制の改革の意向は錢穆も指摘する如く公羊家の採擇するところとなり戊戌の變法の精神となっており、この點で彼も龔・魏と同じく秀れた識見の持主であつたと言えよう。

三 財政危機と包世臣の財政觀

乾隆末年の剩餘七千萬兩が、忽ち使い盡されたのは、白蓮教徒の亂鎮壓の軍事費と黃河の決潰による堤防修築費である

が、この歳出の増加に比較して歳入が著しく減少したことが財政危機を進行させた。更に阿片貿易による銀の流出が一層この危機を増進せしめた。このような状態に際し世臣を始め憂國の士大夫が財政再建案を進言するが、それが一時的にせよその危機を回避せしめた。さてこの章では世臣の財政策の中核となった農政・漕運・河工・鹽政論につきのべよう。

農 政 論

中國の傳統的儒教觀では農を本富とし商工を末富とする思想が存在するが、世臣もこの觀點に立ち農を立國の基礎と考へる。^①ところが當時の士大夫は生産からかけ離れた存在となっており、農民を收奪の對象としか考えない風潮が支配的になりつつあった。ここに實學者世臣の鋭い批判の目が注がれた。

近者農民之苦劇矣。爲其上者莫不以漁奪牟侵爲務、則以不知稼穡之艱難、而各急子孫之計故也。僕深以爲憂。故少小講求農事、爲郡縣農政一書。……中略……故並檢集其書、以廣農政之所極、庶使已仕者、有所取法而改其素行、未仕者知學古入官之不當專計筐篋以兼并農民。(卷二十五 齊民四術目錄叙)

彼は自分が實際に耕作してみても農事の苦しさを體驗し、又地主・官僚層の收奪の烈しいのをみて、その對策を講ずるため郡縣農政一書を作ったのだと言う。彼は鋭敏に農民を生活苦に追いやった原因は地主官僚の收奪と清廷の財政策にあることを指摘した。即ち農民は兩税・丁徭と一田にして三度徴收され、その上官吏の加費が正供の倍に及ぶ程になるので農民は生産意欲を失っている。この結果現狀はまさに憂うべき状態となり、良田はあっても耕作が絶えている。ところがこのような農民の貧苦を理解しない士大夫は、寧ろ田事を卑しいものと考えて、性命を談じたり詞章を矜したりしている。そこで彼は孟子の「人の道たるや、飽食煖衣し、逸居して教うることなければ禽獸に近し」(孟子、滕文公篇第三)と「民事は緩む可からざる也、その田疇を易めしめてその税斂を薄くして民を富ましむ可き也」(孟子、盡心篇一九九)という名句を引いて農本主義による王道政治の復興を叫び、彼自身農政研究の先驅者ならんとする。世臣とすれば農政を指導すべ

き士大夫が孔孟精神に則り農政の意義をわきまゑ農民への誅求をやめ農業知識の普及をはかれば農民に生産意欲が生じて生産力は増大すると考える。従つてこのような見地に立つ彼は人口過剰現象が食糧の不足をきたすというマルサスの考へ方には反對する。周知の如く清朝では康熙時代臺灣の平定が完了して以後中國内地の人口は増加の一途を辿り、ここに識者による人口問題解決策が論ぜられるようになった。そして概して人口過剰が窮乏の根本原因であるという觀點に立つ者が多かった。例えば江蘇省陽湖の人、洪亮吉の治平、生計兩篇は人口過剰現象を「これ我が治平の民の爲に慮る所以なり」と悲觀的な結論を下している。これに對し世臣は生産の向上こそ食糧及び人口問題を解決する道であるという見地に立つ。

說者謂、生齒日繁、地之所產不敷口食、此小儒不達理勢之言。夫天下之士、養天下之人至給也。人多則生者愈衆、庶爲富基。豈反以致貧者哉。今天下曠土、雖不甚多、而力作率不如法。士人日事、佔畢聲病、鄙棄農事、不加研究。及其出而爲吏、牟侵所及、大略農民尤受其害。故農無所勸、相率爲游惰。……中略……西北水利、非不可修舉、而數百年仰食東南、其利弊固皆歷歷可數。(卷二十六 庚辰樸著二)

世臣は食糧對策の一案として西北が數百年に互つて食糧を東南より輸入している事實に着目して西北における官屯の設置により生産の増加をはかり食糧問題を解決しようとする。即ち東南の漕米四百萬石に相當するものを西北で産出する。そこで東南の農民で無業の者を官佃として招き、水利事業を興して土地を開墾せしめ西北での食糧の自給をはかる。一方東南江浙賦重の區の減税をなして民の苦しみを救済しようと言う案である。これは世臣が嘉慶十四年に戴衢亨に江浙賦重の對策として提案したもののだが、實施をみていない。然し世臣はこれを實現させたいという強い意欲をもっていた。

記日窮則變、變則通。漕弊至此、固非變不通矣。必有備事乃有濟……中略……變通之權、惟決於開屯而已。(卷七上中衛一勾 畿輔開屯以救漕弊議)

彼が西北の開屯を強力に主張するのは、再び雍正年間の如く運河が淺涸して南糧を阻止した時、雍正年間と違って儲蓄

が底をついている今では忽ち食糧危機に落ちいるといふのである。更に重要なことは蘇松の重賦が民生の不安定をもたらしている現在、漕量を減しなければ開漕が激化すると言ふ。従前の開漕は棍徒が主體であつたが、近年は力農良民が困窮の結果やむをえずやつており、大吏もそれを姑容するので開漕は増加するばかりである。ここに近年の漕弊の問題がある。以上彼が官屯を主張するのは東南各地でおこる抗租抗糧運動の激化に伴う士大夫の危機意識に依存するものであり、單に田地・食糧不足による開墾という認識からだけではないことが察せられよう。事實彼は農民が年中汗水たらして農業や副業に従事してもその収入が僅かであるので借金暮らしをして窮乏している實情を世人に訴え、ここに抗租抗糧のおこる所以を求めている。

晴事耕耘、雨勤織績。赤背而薅草、跣足而犁冰、出入見星。工作常倍者爲上農。自耕其田、歲息錢不過十四五千文。其佃耕與罷弱者可知也。或有忿迫、奔呼吏門、受斷明速、而歲計已虛、略事遷延、常繼橫貸、滾滾之困、累世不復……貪酷未形、病民已熾、論非谿刻、理則固然。嗚呼、乘時爭力、無忘勤動、撫躬推物、能無怵惕。(卷二十五上 齊民四術作力)

ここには少くとも現場の農民問題を理解せんとした世臣の積極的な姿勢をみることできよう。世臣が農民の減税、官屯策の實施、稻作、畑作、養蠶等における生産技術の改良を叫ぶのも現場の困窮した農民を救済する意識からでた思想であり、これらの案を實施するのだから抗租抗糧運動はさけられないと認識したからである。更に世臣の農民理解で注意すべきことは、農民層における紳富と力作の戸の階層把握をしていたことであり、紳富が力作の戸より凡ゆる點において恵まれている點を指摘し、従つて力作の戸が紳富に對してなす減租闘争を理解しえた點である。これは當時國家權力側の農民把握が紳富レベルにあつたことと對象して重要な相違點である。然し彼が貧窮農民對策としてあげた官屯は當時無意味な存在になりつつあつた。というのは一般に屯田は租税が繁重なる故に屯丁が逃亡し爲に屯田が荒廢し、又屯田の典賣が禁止されていたのにも拘らず、違法して典賣する者が増加する状態であり、政府はその對策に苦慮していた。この點龔自珍が「公田變じて私田となり、客丁變じて徧戸となる」(定食文集卷中 (西域置行省議))という實狀から屯田の無意味なことを指摘し、貧窮

農民問題解決の方向を土地均分の思想に求めたが、ここに世臣が分析して解決しえなかった農業問題解決の鍵があった。

漕運・河工・鹽政論

世臣が農民の生活と國家財政の安定を経世の基本と考えていた以上、農民の生活を壓迫し國家財政を窮乏化させる根源に漕運・河工・鹽政の問題があると認識したのは當然のことである。世臣は漕河鹽問題の根源は一でありきり離せないと言う^④。周知の如く清朝國家財政の約二分の一は官鹽の收入によるものであり、その大半は淮南北鹽でまかなわれていた。又北京を中心とした華北の人民の食糧は、兩浙湖廣を中心とした華中のそれに頼っていたので、漕運對策が國政の重要問題となっていた。又漕運が河運によって行なわれていたため、揚子江下流から黄河下流に至るルートが重要性をおび、從つて水利・運河・治河等の問題がこれと關連してくる。

世臣はこの三事がすべて民生の安定と國家財政に關係するものであり、利を求めやすいので司事者が利のため義を忘れるようになり弊害が生じてきたと主張した^⑤。彼の言う司事者とは國と民の間にあって利を貪る中間搾取者であった。

竊以爲天意欲重困斯民寢削國脉積久。然後知上利國下利民、則中必不利於蠹蠹漁牟者……中略……上病國而下病民、中必大利於蠹蠹漁牟者（卷首 中衢一勾總目叙）

かくして彼が漕河鹽で追求しようとしたことは、この中間搾取者を排除して財政を豊かにし民生の安定をはかるということであったが、これは魏源を始め當時の實學者の共通した意見であった^⑥。

この三事の中では世臣は漕運を尤も重視したが、それは東南の民の重賦により疾苦する状態をみて、それを救済せんことを切實に感じたからであった。その策として先述した如く屯田を興して江浙の額漕を減ずる案と共に、河運より海運に變更する案を主張した^⑦。周知の如く當時漕運に於ては河運・海運論争が再燃していた。黄河の度重なる氾濫と運河堤防修理等に要する費用がかさんできたので公費節約のため海運實施論が高まってくるが、世臣はその先驅者の一人であり既に

嘉慶八年に海運を提案している。世臣が海運を強固に主張するのは河運にまつわる中間搾取を排除するためであった。

漕爲天下之急務者、以其爲官吏利藪也。貪吏之誅求良民、奸民之挾制貪吏、始而交征終必交惡、關係政體者甚鉅。說者皆謂漕弊已極、然清釐實無善策。（卷三 中衢一勺 庚辰雜著三）

當時漕河關係の官吏の苛斂誅求は極まり、經紀の如き奸民が是と結託して惡を倍加していた。清朝では州縣官が糧戸から漕糧を收受して運軍に交兌する方法が取られたが、後運軍が州縣を勒索し州縣が又糧戸から浮收する弊が生じた。世臣はまず州縣官が漕の利をみて民戸よりの誅求をやめないことが漕弊の一つの要因であるとみる。即ち州縣官は一年の用度のためだとして兌費、津貼、旗柁の名目で漕運の浮收勒折を當然の事とし、又虧空の原因を何でもかんでも運軍が兌費を需索することにしてしまうと言う。然るに上司がこれを放任しているのは州縣官からの賄を得ているからだと主張した。

ところで、當時州縣官が餽送・逢迎・規禮等の名目で金錢を私的に上部の督撫—中央官僚に獻納することが慣例化していたが、これが虧空の第一の原因^④となっており、その點を指摘した世臣の主張は秀れたものであった。當時漕運に關する陋規の問題は中央政府でも一大論争を惹起していた。英和が養廉の過度の扣除の結果増大してきた陋規の弊を防ぐため、その一部を認めて他の浮收勒折を禁止せよという案をのべたが法制化を嫌う官僚の反對にあつて實施されなかった^⑤。世臣は陋規が無制限に増大することは、州縣の人民への誅求を増加させることになるので反對し、何等かの法制化の必要を認めたが、同時に「治人あつて治法なし」の原理から州縣官に廉潔の士を得なければ實効は收めがたしという意見であった。又人民への徴收の際その漕糧の負擔が大戸に益して小民を苦しめないよう進言しているが、これは大口が包攬により小民を壓迫する現状を憂えてのことであつた。次に彼は漕運の輸送組織と費用に着目し冗官冗費の撤廢を訴える。

又有漕委、督委、撫委、河委、自瓜州以抵淀津、不下數百員。各上司明知此等差委無濟公事、然不得不借幫丁之肥膏、以酬屬員之奔競、且爲保舉私人之地。（卷三中衢勺 庚辰雜著三）

漕官を始め地方の大官は此等の差委が冗官であることを知つていても廢さないのは、屬員の奔競に酬い、私人を保舉す

る爲だと指摘した。當時官界では師生關係が金錢の私的授受のてルートになっていたことは、すでに先學が指摘されいるが、これが漕運を始め財政に及ぼす影響は甚大であった。然してこれらの師生關係により作られた冗官や書吏などの中間搾取のため多くの耗米をむだにし、南糧が華北に漕運される間に東南の市價の二、三倍に米價がはねあがってしまった。

夫南糧三四百萬石、連糧五千餘艘、截黃達衛、以行一線運河之間、層層倒閘、節節挽緯。合計修隄防、設官吏、造船隻、廩丁舵、每漕一石抵都、常二三倍于東南之市價。雖不能知其確數、所費歲皆以千萬計矣。(卷三 中衢一勺 庚辰雜著四)

このような現状を打開する道は、結局海運以外にないと考えた世臣は、道光四年黃河が氾濫し運河航行が一時不可能になった好機に英和に働きかけ海運實施を上奏せしめている。然し海運實施は上は漕河官吏より下は倉胥・船丁に至る關係者の猛烈な反對により運河工事期間だけに限られた。その後魏源が世臣の海運論を受けつぎ、海運の實施を地勢・事勢・時勢の明確な認識の下に主張し、富國の理論にまで發展させ、道光末期の海運永制化に貢獻することになった。

さて海運が熱心に主張されるようになった一つの理由は嘉慶道光になって黃河の度重なる氾濫のため河運がしばしば中止されたからであった。この河工に費される費用は莫大なものとなるが、それは一つには河工を利用した官吏や商人の暴利によるものであった。即ち河工歳修費の十の九を大小官吏が常に着服していた結果南河の治河總督の所在地、清江浦は揚州の繁榮を奪ったとさえ言われている。

一方運河周邊の民衆は常に水災の危険におびえ、又河費の臨時の徴收に苦しんでいた。世臣はこの事實に鑑みて根本的な治水策と嚴正な公費收支を關係大官に提案する。

予以鳳徐諸郡邑、民瘠而危、數爲變。南河例無攤徵、似難奉行。(卷一 中衢一勺 自序)

即ち嘉慶十三年に江督が黃隄を修汰するのに、鳳泗徐淮揚海六府州より攤徵しようとした時に世臣は反對したが、その理由は攤徵により民の暴動が惹起することを恐れた爲であった。事實嘉慶十一年彼が揚州に滞在中に洪湖が泛漲し下河壩水が災をなした時、罹災者約三萬が揚州に來り鹽典兩商を圍む暴動が発生している。世臣はこの時知州伊秉綬に罹災者の

賑濟を要請している。世臣とすればこのような貧窮な農民より徴收しなくても河員が浪費している河費を節約すれば十分その費用は賄れると考えた。

清江彈丸之地、舊無聲樂。近日流倡數至三千。

計每人日費一金、則合計歲費當百萬矣。……中略……舊例南河庫貯歲修銀五十二萬、而官俸兵餉與焉。今倍之、始足以給娼妓。宜河餉之日告匱乏也。法宜驅絕。(卷一 中衢一勾策河四略(守成總略))

當時河員は上下ぐるになって河費を着服しその公金を彼等の私生活に投入して贅澤の限りを盡していた。普段は樽蒲宴樂にあけくれ、河底の深淺、隄面の高下も研究せず、河が氾濫すればすべてそれを自然のせいにしてしまう状態であった。河工研究の如き實學はまだまだ士大夫にとって尊重されていなかった。これに憤慨した世臣は河工に於ても眞にそれに熟知すると共に、利におぼれない廉潔の士を河官に任命すると共に、上下がぐるになりがちな院道が外工を推薦する制度を改めるよう進言している。又治水に際しては防河的な堤防修理案に反対し挑水壩の採用を提案する。

即ち河流の減ずる冬期に壩を作つて河流を溜に導き其間に河底を深くして汎至つたならば水は槽中に歸し力猛を藉りて舊淤を刷くというものであった。これに關して光緒年間の河督吳大澂は築隄に善策なく鏟掃も久計でないのもこれは良策であると評價している。このような構想のもとに彼が尤も意を注いだのは南河下流の治水である。然し彼の治水策はあくまで現河道を對象としたものであったが、多くの點で彼の策を繼承した魏源の場合は、黄河の治水を恒久的なものにする爲には河道を變更すべきであるという大膽な構想があった。

魏源が「故に曰く、今の河に由り今の道を變ずること無ければ、神禹復生すると雖も治する能わず」(古微堂外集卷)(六谿河篇上)と云つた時、そこには河工百年の計を考えるいかにも公羊家らしい發想があった。

次に國家財政の收入源であると共に民生に深い關係のあるものとして實學者の關心を尤も集めていたものに鹽價の問題がある。世臣は政府が鹽課の收入を保証し特權商人の利益を維持するために私梟を嚴禁しようとする政策を下策とする。

鹽法以兩淮爲大。請言兩淮而以類推之。說者皆謂、私梟充斥、阻壞官引。遂以緝私梟爲治鹽之要、此下策也。(卷三)

中衛一勺 庚辰雜著五)

鹽課が不足するのは商人、船戸が私鹽を販賣し、又鹽官が商人より誅求するからである。このような原因を追求しないで、皆私梟のせいにして甚しきは巨案を醸し、ただ官費を増すやり方は下策である。さて中策には火伏法や官船の烙驗を實施することにより官商が無引の鹽を賣ることができないようにすることがある。上策は大小の管鹽官役をすべて裁撤して運司は錢糧を主り、場大使が竈戸を管して商垣を立てたり畛域を分けたりしないで、州縣・運司・場大使三者の責任分擔と相互牽制により私鹽の發生や官の不正を防止しようとするのである。この鹽政における機構改革や鹽の販賣における稱々の制約をなくして自由な取引を保證しようとする策は、言うまでもなく陶澍の鹽政改革の精神に通ずるものである。周知の如く陶澍は道光十年に兩淮鹽務章程十五條を上つて票法の實施により兩淮鹽政の弊を除かんとしたのであるが、陶澍の幕友として彼の改革に影響を与えたのは魏源、包世臣であった。票法の根本精神は綱法の弊害といわれる豪商の鹽利獨占を排除して鹽の販運を一般商人に解放したことであるが、世臣もこの點を重視し「然して錢糧支絀の故は不銷に由り、不銷の故は私估により、私估の弊は官商より起る」(卷五 中衛一勺 小倦游閣雜說二)とのべ政府が特權商人たる總商を保護して鹽運司庫の管理まで任せていることを攻撃している。政府が總商の如き特權商人を保護した一つの理由は、その商人からの鹽課收入が國家財政の重要な款目であつたからであり、鹽商は特權を享受する代りに政府に所謂報効や賄賂を提供していた。この資金をうるため鹽商は生産者や消費者を搾取したが、このため私鹽が盛行した。そこで世臣はこの報効の停止を要求する。

所需行息經費、皆於提行溢課內案款分解、將借本報効二事、永行停止以杜商口。(卷五 中衛一勺 小倦游閣雜說二)

即ち世臣によれば特權商人を擁護するような鹽政こそその弊害を導いたものであり、こういう意味で票法の實施は十分意義あるものであり、これにより課入は保證されると言う。

伏念、淮北鹽務、久已運商絕迹、正課虛懸。自閣下倡改票鹽以來、產額頗增。(卷七上 中衢一勺 上陶宮保書)

世臣は票法の實施により產額が増加したと一應その成果を認めたが、反面その問題點としてこのことだけで果して梟を化して良となしうるかという疑問を提出する。即ち票法の精神は減價敵私にあり、特に梟私の絶滅を緊急の課題としたが、票法を實施しても梟私がなくならないのは、小販や曬丁などの様に製鹽地の下層階級の對策が講じられていない所に原因を求めている。

今票鹽科則可謂輕矣。而私不止者、以小販不得鹽而無可告。曬丁苦累而莫之恤也。小販不能得鹽於場商、則增價而買於曬丁。曬丁不能取給於場商、則匿鹽而售於梟徒。……中略……然則今日欲救票鹽之弊、其要在平壩價而池價而已。……中略

……曬丁優饒、衣食足而知榮辱、自不至冒禁透私。……中略……岸價平則外私不入、池價增則內私不出、則化梟爲良之原議、必可見諸實事矣。(卷七上 中衢一勺 上陶宮保書)

壩價を平にして勢豪が暴利を貪ることなく池價を増して曬丁等の生活を保障してやる。そして梟徒は合法商人にしてやる。かくして場に透私がなくなれば梟徒は自散するし、岸で能く暢銷すれば轉輸は自速し、國庫は充ち商も裕かなり鹽價も安くなり民生は安定すると結論する。魏源と世臣はその鹽政策に於ても共通した意見の持主であった。魏源の防弊には必ず機構の合理化をはかるということや、票法を實施する案は、大凡世臣の持論でもあった。但世臣の場合は小販・曬丁の如き製鹽地の底邊層の對策あつてこそ梟私の如き無法者を絶滅できると強調しているが、この點に於ては世臣の方が魏源よりも更に民衆の生活に密着しており、それだけ民衆の貧苦を理解しえたことを意味している。

世臣等の財政再建案は一部改革派の大官により採用され上奏されたが、これらを阻止する保守派と關係機關の抵抗も強く幾度か案が見送られた。然し國家財政窮乏という現實に直面した時、その案を吞まざるをえず、全體としては世臣等の實學者の指針した方向で財政策が講じられてくる。但阿片戰爭以後、中國が世界經濟の中に組み入れられるという局面が生じた時、從來の閉鎖的な經濟觀念に依據した世臣の發想では、到底把握しえない問題もあり、ここにその財政策が以後

あまり重視されなかった要因があった。

四 包世臣と阿片戦争

民衆の困窮を増すものとして世臣が特に憂えた現象に阿片密買に伴う銀の流出問題がある。世臣は「鈔幣論」を著し、この銀荒現象が銀貴錢賤をもたらし、これが日常錢を使用する民衆の生活を壓迫している現状に立脚して、銀に代る鈔の發行と錢の價值を向上させようとする。又一方では阿片嚴禁を実施することにより銀荒現象を阻止できると考え、林則徐等の嚴禁派の政治家に働きかけ、政界にその意向を反映させようとした。世臣が阿片嚴禁を最初に主張したのは嘉慶二十五年であるが、世臣はこの頃の情勢につき、阿片區域が閩粵から全國的にひろまってきたことと、蘇州だけで十數萬人の阿片吸飲者がいることをあげ、このため阿片による銀の流出額が正賦の倍になった。だからいくら銀鑛を開發しても銀價は日々高くなっていく。ところが阿片嚴禁が徹底しないのは、司禁の人が阿片の毒に犯され、又阿片販賣者から肥規を受けていて取締りを十分しないためであるので、この際嚴法をもって違法者を罰すると共に、一方では阿片を賣りこむ夷船の出入を禁止する處置を提案している。

但絶夷船、即自拔本塞源。一切洋貨皆非内地所必須、不過裁撤各海關、少收稅銀二百餘萬兩而已。國課雖歲減二百萬、而民財則歲增萬萬、藏富於民之政、莫大於是。(卷二十六、齊民四術 庚辰稗著二)

この案が實現すれば一時的に國課が減じて民財が増加することになり、結局は財政も安定するという世臣の構想に對する反對意見は、弛禁論者にあった。即ち阿片流入阻止のために對外貿易を斷絶すること||拔本塞源は實施不可能であるし、又いかに禁令を嚴重にしても効果はないという反論であったが、事實は廣東における行商、紳士、官僚と政府部内の弛禁派政治家とが結託して阿片貿易を寧ろ合法化せんとしていたのである。このような弛禁派と嚴禁派との抗争は、道光年間に入って銀の流出が一層激しさを加え、阿片の害毒が民衆や官吏をいよいよ蝕む段階に至って嚴禁派に有利に展開し

てくる。世臣は道光八年廣東按察使にあつた書の中で、廣東貿易の直面する大弊として沿海の官紳と洋商が結託し阿片貿易を食い物にして私腹を肥やしているのに上官はこれを取締らないし、又粵中の水師も皆土規を受けているので、英夷と抗争する意欲をもっていない。官吏や軍隊がこんな状態であるので、英夷は廣東貿易に限られているのに實際は江浙にまで阿片を販賣しているとのべ、その對策として再び違法者の取締りと、一方では阿片を賣りこむ英夷の據點 新嘉波を攻略せよと提案する。世臣はここに阿片貿易を絶つ爲には、英國に對する貿易停止のみならず、英國の東洋經營の據點をすら武力で奪取すべきであるという徹底抗戦の思想をもつに至つた。世臣のこの意見は英國の軍事力を十分評價せぬ中華的獨斷政策の一面もあつたが、それが憂國の信念に基づいたものであり、利權の爲には英國の手先にすら墮するものがいた中であつて、十分その意義は認めるべきものと思う。ところが世臣等の意見が反映して阿片嚴禁が黃爵滋により上奏されるのは道光十八年である。世臣は黃爵滋の上奏の時期が遅すぎたと批判するが、今からでも嚴禁が實施できないことはないとのべ、吸飲者や販賣者を嚴刑に處せんことを望んだ。この上奏が動機となつて道光帝は嚴禁策の實施にふみきり、林則徐の廣東派遣となるのである。

この嚴禁策の實施により英國との戦争が避けられないことになるという認識は、當時の經世家は大體もつていた。世臣も英夷は今阿片の收入がへれば國家財政に影響を與えるから、その利を守るために必死に攻めてくるだろうから、これは明末の倭患の比でないと述べている。即ち英國が阿片を中國に流入することが中國を侵略することに結びつけられ、それを究極的に倭患以上の民族的危機と認識した世臣の思想は、天朝意識に基づいて、すべて外國を朝貢國としか考えられなかった朝廷に警告を發するものであつた。ここに彼はその對策として民族をあげての徹底的抗戦と中國に對する列強の通商關係の矛盾を利用して英國を孤立に迫りやる策を提案した。然るにこれらの策を可能にさせる前提條件として漢奸對策を講じておかねばならないとする。世臣は基本的には外患を防ぐにはまず内奸を防ぐべきだという思想をもっており、内奸を防ぐには民生の安定をはかるべきだと考えていた。

是以居今日而籌海、必以拊循閭閻、甦民困、固民心爲先務、而激厲死士、決命於鯨波不測之中、猶其後焉者也。(卷三十五 齊民四術 職思圖記爲陳軍門作)

民生が不安になると秀民が惡の氣を作つて民心を不法に向わせることになるが、これはすべて官の責任であり、官民が相仇している間に外國の侵略の手がのびてきたと考えた。當時阿片貿易を利用して暴利を貪っていた者を漢奸と稱していた。世臣は漢奸が英國と通じないように細心の注意を拂うと共に、漢奸の中でも政府が利用できる者があれば、それを招撫して戦力にすべきであると考えた。

再廣東十年内、添造快蟹船五十餘號、專爲運送煙土。其人與夷船交接熟悉、是當全數收取入官、撫而用之。(卷三十五 齊民四術 與果勇侯筆談)

即ちこのような阿片販賣業者や、游手、壯勇、爛崽などの類や、英國事情に通じている嘉應州の貧士などを官が招撫して、彼等に沿海の海口を防備せしめようという案であつた。彼等が漢奸として行動することは許さないが、國家の戦力になるのなら大いに重用しようというのであつた。この彼の思想は魏源により一層明確に主張された。魏源は「海國圖志 卷一籌海篇二議守下」の中で沿海の械闘の民・煙鹽の私販・海盜・漁船蛋戸や内地の回匪・鹽匪・捻匪・紅湖匪等を政府が招募して兵となせば、勇敢な精銳軍が組織されるし、同時に社會の隱患も消除できると述べている。魏源は官軍が腐敗して英國の侵略に戦うだけの實力をもっていない現在、沿海の人民の力を結集して自衛せしめることこそ、眞の國土防衛になると考えていた。このようにして國內の結束をはかる一方、各國と中國との通商關係を利用して英國を抑制しようとする所謂「以夷攻夷」策を積極的に用いるべきだと世臣や魏源は主張する。

英夷造作毒煙、胎害我內民至此。又復恃強怙惡堅不具結。是以絕其貿易、而各國恭順無過者、自仍舊貫。(卷三十五 齊民四術 與果勇侯筆談)

世臣は英國が船隻の堅固と火器の精巧なることで中國より秀れている點は認めるが、中國と通商を欲する各國も同技を

もつ故、これらの國に通商を條件に結束させ英國と對抗せしめれば中國の安全をはかれると主張する。ところが魏源となると「以夷攻夷」策を主張しても、國際的な視角に於て、當時インドにおいて英國と敵對關係に於つたグルカの兵力を利用したり、アフガンをめぐる英露の對立を利用したりしようとするのであるが、この國際狀勢の分析には甘さがあつたけれども、世臣に比べてその國際感覺の豊富なことと、合理的客觀的な外交認識においてはるかに秀れたものをもつていたと言えよう。このような認識の相違は、その貿易政策に於てもみられるのであり、世臣が終始一貫して英國の阿片貿易を絶つためには撤關絶市を主張し續けたのに對し、林則徐・魏源は當時の國際狀勢の進展からみても、阿片は嚴禁しても正常貿易は積極的に進めるべきであるという思想をもつていた。このように外交政策に於ては世臣・魏源には見解の相違はみられたが、阿片嚴禁の實施と、それにより生じた英國の侵略に對する徹底抗戰の姿勢と、腐敗した官軍に代る民兵の採用という基本線では一致していた。周知の如く阿片戰爭の初戰に勝利を收め勢にのつていた英軍に一撃を與えたのは、三元里の義民であつた。

竊謂夷好不可恃、海防不可廢。粵人素羨水師豐厚。且山原里奇功礙難聲紋。似宜選義民、使充水師、以渠率爲其汎舟、義民必皆樂從、逆夷驚魂未定。(卷三十五 齊民四術 答果勇侯書)

世臣はこの三元里の義民を用いて彼等を水師にして英軍の進犯に抵抗せしめると共に、珠江沿岸の礮臺を修復し防衛を強固にして香港を直收して恥をそがんことを楊芳に進言している。魏源も亦三元里の戦いを高く評價して決して英軍に劣らないと言う。

三元里之戰、以區區義兵、圍夷酋、斬夷帥、殲夷兵、以款後開網縱之而逸、孰謂我兵陸戰之不如夷者。

(海國圖志卷一 籌海篇一)
議守上

外敵の侵入に際し、眞に國土防衛の任に當るのは義民であり、そのゲリラ的戦法は武器の劣る中國の最も効果的な英軍撃退法であるという世臣・魏源の認識は、人民の力量を高く評價したものととして意義のあることであつた。ところが當時

の清朝政府の認識は、人民の力を評價せず、寧ろこれを危険視する傾向すらあり、世臣・魏源の意向をくんで人民の抗英運動を評價して英國との抗戦を積極的に展開しようとした林則徐を罷免して、妥協派の琦善を欽差大臣となした。かくして清朝政府及び官兵は英國の侵略に抵抗する氣力にかけ、その侵略にまかせたので、英軍は一八四二年八月直ちに南京に迫り、政府を強迫して城下の盟を結ばせた。この時世臣は南京に滞在しており、英軍に迎合せる腐敗した官兵・官吏・巨紳と、英軍の殘酷な行爲をみて、痛恨の感極まり、「殲夷議」なる一文を發表した。この中で世臣は、この際氣矜を尙ぶ兵を用いて奇襲戦法をもつて南京城内の英軍を追い出し、長江を封鎖してこれを壊滅せんとするものであり、これこそ禍を轉じて福となし、威を振って恥を雪ぐ大機會だと關係官僚に進言したが受けいれられなかった。そこで世臣は、政府部内で南京條約の批准に獨り反對した祁大臣に書を送り、その中で彼は再び官軍のぶざまな敗戦ぶりに比較して三元里や沈山頭の義民の英雄的行動やその他抗戦の實例を示して人民を義兵として採用することを提案している。それと共に政治は人にあるという信念から、野に埋もれている人材を拔擢して官となし、その良官の指導のもとに良民を結集して莠民を教化して困難に當らんとしている。

民情撫貳、宜急所以維繫之、兵氣渙散、宜急所以鎮一之。維繫散民因用良吏、鎮一儒兵在親選鋒……中略……亦唯在上者重氣節敦廉恥、以大示轉移之機已耳。(卷三十五 齊民四術 致徐侍御書)

即ち彼は民情には絶對的な信頼をおかず、これを正しく指導する者として良官の存在をクローズアップしてきた。そしてこの良官と良民の協力體制が確立してはじめて外敵を防ぐことができるとした。こういう點で彼の思想は「外患は必ず内奸による」ということで貫かれ、それを防止する根源は、結局儒教的理念を實踐し得る良官であつた。眞に外敵と戦うのは人民であるという認識に到達しながら、一方では人民の革命的氣運を警戒し、結局は人民を清朝國家體制維持に役立てようとするものであつた。

おわりに

世臣は經學者でなく實學者として一生を過した。この事は彼を評價する場合に、二つの意見を生じさせた。即ち經學の傳統を尊重する學者からみれば、經學的業績のない彼は問題にされなかった。ところが實學の意義を重んずる學者からみれば、彼を清末改制の先驅者として高く評價した。

嗚呼先生非一縣之人、實天下之人、非一生之人、實萬世之人也。全書具在世之爲有用之學者、皆當奉爲圭臬。（胡韞玉包慎伯先生年譜 漢學齋叢刊所收）

胡韞玉はこのように世臣に最大の賛辭を送り、内藤湖南も亦世臣が經濟の學に秀でている點を指摘している。胡濱も亦世臣の思想は、中小地主の利益を反映するものであるが、官僚社會を批判し勞働人民の悲慘さに對して注目した思想家としている。筆者も亦彼の眞價は有用の學即ち實學にありと考え、その全貌を明らかにした積りである。世臣と魏源を比較した場合、その經濟政策に於ては世臣が基本的には農を本にして工商は末であり、從つて利の追求を排斥するのに對し、魏源は寧ろ商業の發展を重視し利を積極的に追求しようという姿勢があったが、當時の經濟界の實狀とその後の中國の發展を指向する觀點からみると、魏源の學が世臣より説得力のあるものとなった。又その對外政策に於ても世臣には魏源の様な國際的觀點がなかった。總じて公羊學という思想的根據のない世臣の經世策には未來へのイメージがかけられており、現状の分析では細密であっても、改革への構想では龔・魏の様な大膽な設計圖がなかった。然しそれにも拘らず私が世臣を高く評價するのは、彼が人民の租稅負擔を輕減することを政治の基本と考え、特に魏源すら論じなかった底邊の民衆の生活の向上を政策の視點にすえていた點である。單なる理念ではなく、實踐に於ても民衆の幸福を求め續けてきた彼の思想が、三元里の人民の行動に共感でき、それを率直に評價することができたのである。

今日中國近代史研究において帝國主義に抵抗した人民の役割が評價されている時、その人民のエネルギーを的確に把握

した思想は、價值あるものである。特にその人民を觀念としてでなく、活動する主體として、然も底邊から把握した世臣の思想は、歴史の進むべき方向をみていたと言えよう。士人階級である世臣が、その禮教的秩序再建という課題に取り組み模索し續けて提案した政策は、寧ろその秩序を變革する方向にあった。さてこの小論で筆者が追求してきた課題は、この過渡期にある士大夫の思想を追求することが、その後の中國近代思想史研究に何等かの貢獻をなし得ると思つたからである。

註

① 包世臣に關する傳記は清史稿列傳一三・清史列傳七三・續碑

傳集七九・清代樸學大師列傳（治事學家列傳二）にある。又

年譜として彼と同郷の光緒末の國粹學報の主筆であつた胡鑑玉

の「包慎伯先生年譜」（樸學齋叢刊所收）がある。又包世臣に

關する研究として胡濱「包世臣の思想」（光明日報一九六三年

二月一八日）、文論に論ずる研究に青木正兒「清代文學評論

史」がある。書家としての研究に瓶盒「包安吳」（書苑第五卷

第三號）がある。包世臣の著書は道光二十四年初版の「安吳四

種」がある。安吳とは彼の出身地涇縣の三國時代のよび名であ

る。本稿は「安吳四種」を分析して彼の思想の全貌を明らかに

せんとする試論である。尙彼の思想を理解する參考資料として

包世臣の年譜略を付記しておく。

一七七五 乾隆四十年、安徽省涇縣に生れる。

一七八一（六歲） 乾隆四十六年、父と共に白門（江寧）に滞

在。

一七九二（一七歲） 乾隆五十七年、父の病氣により歸郷。貧

苦のため農耕に従事、龔自珍生れる。

一七九四（一九歲） 乾隆五十九年、魏源生れる。

一七九六（二一歲） 嘉慶元年、この頃より諸國巡遊の生活始

まる。白蓮教の亂おこる。

一七九七（二二歲） 嘉慶二年、安徽巡撫朱珪の幕友となる。

一七九九（二四歲） 嘉慶四年、川楚左參贊明亮の幕友とな

る。

一八〇一（二六歲） 嘉慶六年、朱珪の招きで入都する。

一八〇二（二七歲） 嘉慶七年、常州に行き李兆洛と會う。

一八〇四（二九歲） 嘉慶九年、揚州に行き凌曙・劉文淇と會

う。又周濟を知る。白蓮教の亂鎮まる。

一八〇八（三三歲） 嘉慶十三年、白門での科試に合格し舉人

となる。戴衢亨、百齡が彼の「箴河芻言」をみて才を認め

る。

一八〇九（三四歲） 嘉慶十四年、戴衢亨に漕運問題を進言。

一八一〇（三五歳） 嘉慶十五年、揚州倚虹園に假居。

一八一（三六歳） 嘉慶十六年、兩江總督百齡の幕友となる。陽湖の惲敬を知る。

一八二（三七歳） 嘉慶十七年、白門にて姚鼐と會う。

一八四（三九歳） 嘉慶十九年、江淮大旱となり待講學士秦承業に荒政の籌備を進言。龔自珍「明良論」を發表。

一八九（四四歳） 嘉慶二十四年、工科給事中胡承珙の爲に積案弊源を條陳。この頃より刑政に取組む。

一八二〇（四五歳） 嘉慶二十五年、刑部尙書韓鈞に刑政策を論ず。又「庚辰襍著」を著し阿片問題に警告を發す。

一八二五（五〇歳） 道光五年、協辦大學士英和に海運策を進言。又河鹽漕の書三卷を刻して「中衢一勺」と題す。

一八二六（五一歳） 道光六年、粵海關署に客たり。この頃より英國の阿片貿易激増す。

一八二七（五二歳） 道光七年、兩江總督陶澍の幕友となる。魏源の努力により「皇朝經世文編」なる。賀長齡と會う。

一八二八（五三歳） 道光八年、廣東按察使姚祖同に書す。

一八三〇（五五歳） 道光十年、小倦游閣雜説を著し、鹽政と取組む。陶澍・淮南で票法實施。

一八三二（五七歳） 道光十二年、刑部尙書戴敦元に刑政を進言。

一八三四（五九歳） 道光十四年、白門北門橋西北に買宅。

一八三五（六〇歳） 道光十五年、大挑により江西に赴くも母の死亡により在任守制となる。

一八三七（六二歳） 道光十七年、王鑒に書を送り鈔法を論ず。

ず。

一八三八（六三歳） 道光十八年、江西省新喻の知縣となる。

林則徐欽差大臣となり廣東に向う。

一八三九（六四歳） 道光十九年、林則徐・豫章にて世臣と會い阿片問題につき協議。阿片嚴禁策實施。

一八四〇（六五歳） 道光二十年、阿片戰爭おこる。

一八四一（六六歳） 道光二十一年、三元里の人民の抵抗あり。

一八四二（六七歳） 道光二十二年、英軍南京に迫る。南京條約締結。「殲夷議」を著す。

一八四三（六八歳） 道光二十三年、魏源の「聖武記」の審定。

一八四四（六九歳） 道光二十四年、「管情三義、齊民四術、中衢一勺、藝舟雙楫」を安吳四種として出版。

一八四六（七一歳） 道光二十六年、桂超萬に漕運對策進言。

一八五一（七六歳） 咸豐元年、太平天國運動おこる。

一八五五（八〇歳） 咸豐五年、包世臣死す。

一八七二、同治十一年、世臣の子・誠が「安吳四種」再版。

② 小島祐馬氏「中國の倫理思想」（中國の社會思想）所收において清初の顏李學派が經世濟民を旨とする實學を提唱した點をあげ、顏習齋の實學の四大綱領は兵農禮樂とあるが、包世臣も亦「齊民四術」として兵農禮刑をあげているのと對比できる。李澤厚「論十九世紀中國改良派變法維新思想的發展」（康有爲・譚嗣同思想研究）においても龔・魏等の思想は明末清初の經

世思想の繼承であると考ええる。即ち彼等が社會に連りのある實際的態度を重視し學問は國を救ひ民を救う爲にやるものであると考え、學者は書齋を出て實社會に入り空談をするのでなく實學を論ずることが大切だとのべたのが、明末清初の現實的思想の繼承であるとする。

- ③ 梁啓超「清代學術概論二〇」に「清初經世致用之一學派所以中絕者、固由學風正趨於歸納的研究法、厭其空泛、抑亦因避觸時忌聊以自藏。嘉道以還、積威日弛、人心已漸獲解放。而當文恬武嬉之既極、稍有識者、咸知大亂之將至、追尋根原、歸咎於學非所用」とある。

- ④ 安吳四種卷八 藝舟雙楫 讀亭林遺書

- ⑤ 清稗類鈔卷三三 諫諍類・朱文正諫弛禁書に「康熙以來屢以文字興大獄。(中略)嘉慶初大興朱文正公珪奏言、言詩文之詆謗本朝者、正如犬桀狂吠。聖人大公無私何所不容。禁之則秘藏愈甚。仁宗然之、禁始弛。明末遺書遂復有刊行者」とある。

- ⑥ 「仁宗實錄」卷五〇嘉慶四年八月癸丑。

- ⑦ 魏源「武進李中者先生傳」(古微堂外集卷四)に「其論學無漢宋、惟以心得爲主、而惡夫以鉅釘爲漢、空腐爲宋也。故以通鑑通考二書爲學之門戶」とある。

- ⑧ 梁啓超「中國近三百年學術史」(清代學術變遷與政治的影響下)

- ⑨ 「近儒學術系統論」(國粹學報第三年第三號—劉師培)に「時魏源包世臣亦縱游江淮間、士承其風間言經世、然仍以治經爲本」とある。

- ⑩ 清代樸學大師列傳—馮桂芬。
治事學家列傳—馮桂芬。

- ⑪ 李申耆年譜卷二 道光七年の條に「丁亥……在暨陽時、陶文毅陽湖弟子蔣彤編公撫蘇已三年矣、書疏頻繁、至是固請主講省垣正誼書院」とある。

- ⑫ 魏源「荆溪周君保緒傳」(古微堂外集卷四)に「君少與同郡李君兆洛、張君琦、涇縣包君世臣、以經世學相切劘、兼習兵家言」とある。又晉略に關して魏源は同著で「以寓平生經世之學、借史事發揮之、遐識渺慮、非徒考訂筆力過人」とのべ、世臣は「安吳四種」卷九(藝舟雙楫)で「匪典午之要刪、實千秋之金鑑」とのべ、共に晉略が單なる考證の史でなく經世思想に基づいて書かれている名著であると規定する。

- ⑬ 謝正光「宜南詩社考」(大陸雜誌第三十六卷第四期)によれば、道光十年宜南詩社成立と、維新思潮の先驅とする説を疑問とされている。但謝氏が嘉道期になって盛行してくる詩社を單なる傳統的な士大夫の風雅韻事であると判斷しているのは早計である。

- ⑭ 張亨甫全集卷二十乙未(舟中作寄少穆中丞) 參照。

- ⑮ 清代燕都梨園史料總目に「三官廟中有花之寺。壬辰初入京、夢華瑣簿一卷。

龔定盦招余會公車諸名士、宋子庭・包慎伯・魏默深・端木鶴田諸公十四・五人」とある。包世臣・魏源・龔自珍の交流は道光年間に入ってからかなり活發であつたようである。魏源「與涇縣包慎伯大令書」(古微堂外集卷八)で、魏源は世臣が掌故を敘述するに際して誤りが多い點を注告しているが、反面世臣に聖武記の審訂を依頼するなど、實學の先輩として彼の意見を尊重している。又己亥雜誌第一三一首に「涇縣包慎伯贈予瘞鶴銘」とあり、龔自珍と包世臣の書を通じての交友關係が察知できる。

①⑥ 林崇璫「林則徐傳第十二章」に「在江南、他公餘常與當時名士、如石鑑玉・包世臣魏源等人、親切交遊、聽取他們意見、以供施政參考」とある。

①⑦ 劉師培「近儒學案序」（左龔外集）。

①⑧ 安吳四種總目錄。

①⑨ 民報十四號「清儒得失論」に「時涇縣包世臣嫺明律令、備聞民間疾苦、於鹽漕河諸大政、大洞悉弊端、略近永嘉先哲（中略）而邵陽魏源亦修言經世、精密迥出世臣下」とあり世臣の學は禮樂刑政の道を重んずる永嘉學派（葉適）に近いものがあり、その經世の學は魏源より秀れていると評價している。

②① 安吳四種卷八 藝舟雙楫 讀亭林遺書

②② 安吳四種卷三十六 讀安吳四種書後。

②③ 青木正兒氏「清代文學評論史」（第八章中期以後桐城派其他の文說三包世臣の項）。

②④ 安吳四種卷八 藝舟雙楫 與楊子論文書

②⑤ 國粹學報第一卷（包慎伯致沈小宛書）。

②⑥ 安吳四種卷九 藝舟雙楫 論史記六國表跋

②⑦ 國粹學報第二年「羣經大義相通論——公羊荀子相通論」で劉師培は荀子の學が公羊學に通じていることを指摘し、諸子の學を幅廣く研究することの必要を説いたが、このような主張の先驅者は包世臣であった。

②⑧ 侯外廬「中國早期啓蒙思想史」（第十七龔自珍的思想）人民出版社。

②⑨ 島田虔次氏「朱子學と陽明學」（岩波新書百十七頁）によれば、この名句で言う利は士大夫の社會にあつては、その内容が

もつぱら科擧の害を指摘したとあるのは注目してよい。

②⑩ 安吳四種卷二十七 齊民四術 答楊承宣書

②⑪ 安吳四種卷二十八 齊民四術 庚辰襍著一

②⑫ 安吳四種卷三十 齊民四術 姚生傳

②⑬ 安吳四種卷二十九 齊民四術 答錢學士書

②⑭ 龔自珍「定齋文集」擬重訂五事書。

②⑮ 安吳四種卷二十八 齊民四術 庚辰襍著

②⑯ 安吳四種卷三十四 齊民四術 答魏默深書

②⑰ 安吳四種卷三十六 齊民四術 讀安吳四種書後

②⑱ 聞鈞天「中國保甲制度」第七編・保甲制之復興（下）第二節（三）包世臣之保甲議に「按包氏之國結鄉勇、意在保全地方、故用保恤之情、以密爲連絡云々」とあり、教團と保恤をその特點としているとあるが、世臣の保甲法が當面の治安對策よりも、恒久的な鄉村統治を目標としていたことは明らかであつた。

②⑲ 黃爵滋奏疏卷四 綜核名實疏。

②⑳ 安吳四種卷二十八 齊民四術 庚辰襍著一

②㉑ 安吳四種同治壬申秋重刊本の卷首の序。

②㉒ 安吳四種卷二十五 齊民四術 農政

②㉓ 安吳四種卷二十五 齊民四術 農政

②㉔ 安吳四種卷三 中衢一鈞 庚辰雜著四

②㉕ 安吳四種卷四 中衢一鈞 海濱問答

②㉖ 安吳四種卷四 中衢一鈞 海濱問答

②㉗ 安吳四種卷四 中衢一鈞 海濱問答

②㉘ 安吳四種卷四 中衢一鈞 海濱問答

②㉙ 安吳四種卷四 中衢一鈞 海濱問答

總督林則徐が「畿輔水利議」として上奏している。又魏源は「古微堂外集卷八」（軍儲篇四）の中で畿内における八旗屯田の窮乏を救済する方法として、新疆伊犁の屯田策に見習って自給自足させるべきだと述べているが、當時實學者の間には、民生や財政の危機を屯田の實施により防止しようとする意見が多かった。

④⑤ 安吳四種卷七 中衢一勾 畿輔開屯以救漕弊議

④⑥ 「近代中國農村社會史研究」（太平天國前夜の農民闘争）の中で小林一美氏は包世臣が鎮洋、昭文兩抗租暴動に際し「減租論」を提案した意義を評價している。

④⑦ 安吳四種卷二十五 農政 の中で「紳富之戸以銀米數多而耗折較輕、力作之戸、以銀米數少而耕折倍重」とあり、紳富の戸がこの耗折を利用して力作の戸を壓迫するものだから、力作の戸は饑寒にでも會えば、財を竭して流亡化することを指摘する。

④⑧ 安吳四種 中衢一勾 卷首總目敘
④⑨ 右同。

⑤⑩ 魏源「古微堂外集卷八」軍儲一に「何謂除弊之利、天下大政、利於國利於民者、必不利於中飽之人。天儲所仰莫如漕鹽、行之二百歲、百寶千蠹晝夜蝕蝕」とある。

⑤⑪ 安吳四種卷一 中衢一勾 自序。

⑤⑫ 安吳四種卷四 中衢一勾 海浞問答

⑤⑬ 安吳四種卷三 中衢一勾 庚辰雜著三

⑤⑭ 鈴木中正氏「清末の財政と官僚の性格」（近代中國研究二）

参照。

⑤⑮ 宮崎市定氏「清代の胥吏と幕友」（東洋史研究十六卷四號）参照。

⑤⑯ 安吳四種卷七 中衢一勾 答往蘇州第三書

⑤⑰ 鈴木中正前掲書。

⑤⑱ 安吳四種卷一 中衢一勾 自序。

⑤⑲ 魏源「古微堂外集卷七」（籌漕篇上）

⑥⑩ 清稗類鈔卷五十六豪侈類「南河官吏之食品」の中に「南督駐江蘇清河縣之清江浦、以有歲修費五六百萬金。大小官吏常乾沒其十之九、驕奢淫佚、乃遂著稱於道光時、即飲食言之略舉一二、幾有非帝王所可及者」とあり。又清稗類鈔卷五十六豪侈類「典商汪己山之侈」の中に「清江浦爲南北孔道。乾嘉間河工極盛、距二十里即湖嘴、乃淮北鹽商聚集之地、再五里爲淮城乃漕船所必經者、河鹽漕三途、併集一隅、故人士流寓之多、雖吳門亦不逮也」とある。

⑥⑪ 安吳四種卷二 中衢一勾 答友人問河事優劣

⑥⑫ 安吳四種卷七 中衢一勾 南河善後事宜說帖

⑥⑬ 安吳四種卷一 中衢一勾 策河四略（守成總略）

⑥⑭ 安吳四種卷二 中衢一勾 說壩一

⑥⑮ 岑仲勉・黃河變遷史 第十四節下清代的河防

⑥⑯ 安吳四種卷三 中衢一勾 第五清人沿河的技术

⑥⑰ 安吳四種卷三 庚辰雜著五

⑥⑱ 安吳四種卷二十六 齊民四術

⑥⑲ 佐伯富氏「清代鹽政の研究」第六節参照。

⑥⑤ 安吳四種卷二十六齊民四術
庚辰棟著二・與張淵甫書・答王亮生書・再

答王亮生書・銀荒小補說・答族子孟開書・致前大司計太常書の中て世臣は鈔幣論を展開している。當時銀荒現象の対策として①銀礦を開く②大錢を鑄す③鈔法を行なうの三案があった。世臣は①、②案の弊害をとくと共に、③案に於ても無制限な鈔の發行を主張する王鑒に對して、世臣は銀との兌換の可能な範圍で鈔を發行して銀を吸収し、結局は錢鈔中心の貨幣制度を確立していこうとする主張で、その意圖は錢を使う民衆の生活の安定にあった。

⑦⑥ 安吳四種・卷二十六齊民四術
庚辰棟著二

⑦⑦ 田中正美氏「東アジア近代史の研究」(アヘン戦争時期における抵抗派の成立過程)参照。

⑦② 安吳四種卷三十五齊民四術
致廣東按察使姚中丞書

⑦③ 安吳四種卷三十五齊民四術
職思圖記爲陳軍門作

⑦④ 安吳四種卷三十五齊民四術
與果勇侯筆談

⑦⑤ 籌辦夷務始末卷二十一「諭、我朝撫馭外夷、全以恩義、各國果能恭順、無不由加優禮、以期共樂昇平。前因西夷鴉片煙毒日甚、特頒禁令力挽瀟風。惟咄咄嘲恃其驕悍不肯具結。是以降旨絕其貿易……」とある。

⑦⑥ 田中正美氏「阿片戦争前における漢奸の問題」(史學研究昭和三十三年三月)参照。

⑦⑦ 安吳四種卷三十五齊民四術
與果勇侯筆談

⑦⑧ 海國圖志によれば、包世臣と違つて西洋事情を研究した魏源には、西洋諸國の政治經濟のしくみがある程度把握してスイス

を理想郷と考えたり、合衆國の共和政體を驚異の目でみており、そこから清朝專制政體を暗に批判し、そこに阿片戦争敗北の原因を求める思想をもちえた。

⑦⑨ 范文瀾「中國近代史上」第二章第二節、および寺廣映雄氏「廣東における抗英運動」(大阪學藝大學人文科學三、一九五四年)参照。

⑧⑥ 籌辦夷務始末卷二十七靖逆將軍奕山、參贊大臣隆文、兩廣總督祁項の奏に「是防民甚於防寇。此奴才等所謂不在外而在內者此也」とあり、奕山等は廣東人は漢奸だと言つて遠くの方から客兵を動員し廣東人を壓迫している。

⑧⑦ 安吳四種卷三十五齊民四術
彙夷議

⑧⑧ 林崇墉「林則徐傳」第二十五章に「王鼎死後、軍機中依次爲穆彰阿、潘世恩、祁雋藻、寶尙阿、何汝霖等五人。史稱祁雋藻不主和議、與穆彰阿論洋務不合。證以此則便知其爲一士譚諫、獨在軍機中支援文忠。但因勢孤終無實濟。其餘各人、則切憚於穆彰阿的權勢、不敢抗爭」とあり、阿片戦争後穆彰阿の權力が増大し、林則徐・魏源・包世臣等抗戰派に連なる政府高官は祁雋藻のみとなつて後退したことが察せられる。

⑧⑨ 安吳四種卷三十五齊民四術
致祁大臣書

⑧⑩ 安吳四種卷三十五齊民四術
致前四川督部蘇公書

⑧⑪ 李慈銘「越縕堂讀書記」下(安吳四種)

⑧⑫ 內藤湖南氏清朝史通論
第五講經濟

⑧⑬ 胡濱「包世臣の思想」(光明日報 一九六三年十二月十八日付)

◎ 李澤厚「康有爲、譚嗣同思想研究」十八頁に「龔魏都重視商業的發展、他們主張言私言利」とのべ、これらの思想は中國社會内部の資本主義經濟發展趨勢の反映であると共に、明末以來の工商皆本思想の延長であり後の資本主義思想の端緒をなすものと述べている。

東洋史研究叢刊之二十四

宋代文集索引

佐伯 富編

A5版 本文八四五頁附筆劃檢字表
定價 四千圓

本索引は宋代の文集 范文正公集（范仲淹）、河南先生文集（尹洙）、歐陽文忠公全集（歐陽脩）、元豐類藁（曾鞏）、樂全集（張方平）、溫國文正司馬文集（司馬光）、盤洲文集（洪邁）、水心文集（葉適）、朱文公文集（朱熹）、西山先生真文忠公文集（真德秀）の十種目中に含まれる人名、地名、官職名、その他法制、經濟、社會、官制、兵制、民族、宗教、文學、美術、思想、掌故などあらゆる部門に關する名辭、約七萬の項目を摘出し、これを五十音順に排列したものである。

右書御希望の方は本會までお申込み下さい。

京都市左京區吉田本町京大文學部内

東洋史研究會

振替京都 三七二八番